



やまゆり



2023 (令和 5) 年度には、第 25 回世界スカウトジャンボリー (25WSJ) を始め、横浜地区の第 6 回横浜地区キャンボリー等様々な活動が実施されました。本号では、それらを概括してお知らせします。

第 25 回世界スカウトジャンボリーは、2023 年 8 月 1 日 (火) ~8 月 12 日 (土) の 12 日間に渡り、大韓民国・全羅北道セマングムに於いて、158 の国と地域から約 43,000 人が参集して開催されました。

折からの猛暑に加え台風 6 号の猛威に晒され、後半は避難を余儀なくされましたが、多くのプログラムを通して世界中のスカウトが友情を育み、相互理解を深めたことと思います。

先ず始めに、25WSJ に参加した指導者 & スカウトの報告からご紹介します。

「25WSJ 報告 ~ 未来のリーダーへの一歩」

第 7 隊 隊長 亀田幸成
ジャンボリーは、わずか 2 週間の中に数万人規模の若者たちのための仮想都市を生み出す特別な出来事です。その規模は通常の都市に比肩し、



ゴミ処理から医療施設の設置まで、幅広いインフラ整備が求められ、実現には驚くほどの労力と協力が必要です。ジャンボリーの開催とその準備段階には、私たちが目の当たりにする驚異が詰まっています。大会の会場に足を踏み入れ、広がるカラフルなテントの群れを見渡すと、私の心には'72 年の札幌冬季オリンピックのテーマソングが蘇ります。「街ができる、美しい街が。あふれる旗、叫び、そして唄・・・」。この歌が頭の中に流れるとき、過去の経験、猛暑下での今回のキャンプ生活、そして一緒に過ごした仲間たちの顔が思い出され、時には涙を誘います。派遣スカウトにとっても、若い時期に共同生活とプログラムを国内外の仲間と共に経験したことは、一生の宝物となるでしょう。

第 25 回世界スカウトジャンボリーは、韓国セマングム (日本派遣団は、後半は避難所として忠清北道・救仁寺に滞在) で開催されました。参加者にとって、このイベントは様々な偶然/必然の重なりから、非常に特別な経験となりました。日本派遣団全体の活動についての詳細なレポートは、「25WSJ 日本派遣団長所感」というタイトルで、日本連盟の公式ウェブサイトで読むことができます。神奈川連盟は、2 隊 (他県連との共同隊)、7 隊、8 隊、IST (International Service Team)、さらに本部要員を派遣しました。中でも、7 隊と 8 隊はそれぞれ 40 名のメンバーで構成されており、異なるサブキャンプエリア

で野営生活を送りました。セマングムの土地は、私たちが学んだ歴史の中で有名な「白村江の戦い」の舞台に近く、猛暑の干拓地に位置しており、時折弱い海風が吹き抜ける場所でした。ジャンボリー前半は高温のため、プログラムの多くが中断されましたが、スカウトたちは他の隊との文化交流を通じて自己成長を遂げ、将来への希望を抱くことができました。私は隊長として、毎日、数名のスカウトをクリニックやホスピタルに連れて行く任務や隊長会議に参加する日々を過ごし、プログラム参加の現場と一緒にいる機会が少なかったため、夜の集会でスカウトから聞く一日の報告が楽しみでした。

神奈川連盟から派遣された7隊・8隊は、異なる原隊の性格を反映してか、隊のキャラクターにも興味深い特徴が感じられます。7隊は比較的静かで堅実な隊であり、一方、8隊は元気に満ち溢れ、賑やかな隊でした。静かな7隊のメンバーたちも、生活上の衝突が生じた場合には積極的に話し合いで問題を解決し、将来のリーダーとしての素質を示していました。彼らが帰国後も素晴らしいリーダーシップを発揮し続けることを予感しています。



7隊 河内真凜

私は、人生で1番濃い2週間を過ごせました。世界の文化を直に体験できたり、海外の友達もできました。接点の無かったみんなと「ボーイスカウト」を通して出会い、生活を共にできた

ことにとても感謝しています。厳しい暑さに見舞われながらの野営生活なうえに言語がうまく通じないことも多々ありました。しかし、そんな辛い瞬間を乗り越えて日常を楽しむという経験ができ、ボーイスカウトを続けてきてよかったなと心底思います。

第8隊 隊長 三村芳正

WSJの隊長に求められる資質は、原隊の隊長のそれとは全く異なる。BSスキルが上手である必要は全くない。未知の相手に対して臆せず行動することと、予想外の出来事を楽しむ心、そして何事も受け入れる度量の大きさである。そこでは人間の器が試される。スカウトや隊を守るためには時には規則を破って行動する判断力も求められる。結果オーライなのだ。

WSJの参加スカウトに求められる資質もほぼ同様である。設営なり調理なり、長期のキャンプ生活に必要な最低限のスキルが求められるので応募資格は1級以上だが、原隊で習得したスキルよりも、実際にWSJに参加してから身につけたスキルのほうが重要だ。特に英語による異文化コミュニケーションは現地で鍛えられ開花した。事前の訓練もさることながら、若さゆえの柔軟性も各人の爆発的な成長に寄与していることは間違いない。人生のこの時期にWSJを体験する最も重要な意義だと考える。



WSJあるいは長期キャンプにおけるリーダー

一の懸念は、スカウト同士の関係である。会話を重ね、相手を理解すると、好意や確執が生まれることは避けられない。そういったスカウト個々人の感情を間接的に把握し、問題が起きないように組織を維持することが最も難しい。この分野においては性差別と言われようが、女性リーダーが優る。その意味で、素晴らしいリーダー陣に恵まれたことに感謝する。

最後に、BS活動を盛んにしたい、スカウト数を維持したいというボーイスカウト共通の課題に一言申し上げるならばWSJ参加をゴールとして日々の活動を計画、運営することである。スキル訓練に辟易しているスカウトに、WSJがまるでテーマパークのような楽しさであることを理解させ、参加意欲を醸成し、それを目標に1級取得を促すロジックが妥当かつ効果的である。

WSJは本当に楽しく、素晴らしい。BS活動に関してWSJに参加しないのは、宝を捨てるようなものだ。



8隊 遠藤木乃葉

世界ジャンボリーに参加する前は不安でいっぱいでした。私は最長でも3泊4日のキャンプしかしたことがなかったので、そもそも2週間、

炎天下の中で生活出来るのだろうかという不安が1番大きかったです。それと同時に日本語が通じないという事実に対しても不安が湧き上がって来ました。しかし、いざキャンプ生活を始めてみるとジャンボリーの生活にすぐ慣れました。3日ほど経った頃にはこの生活が心地よいと思えるほどにまで居心地の良い空気と生活空間を作れたと思います。

また、海外スカウトとの交流では英語が流暢でなくても、話そうと思う気持ちが強いほどお互いに意思疎通が出来たのではないかと思います。失敗を恐れずにもっと沢山話せば良かったと今になって思いますが、今回の交流が英語で話すことの自信へと繋がったためとても意味のある時間でした。

私が1番思い出に残っていることはイギリスのスカウトに浴衣を交換品として渡したことです。浴衣を交換したときに、物凄く喜んでくれたことを覚えています。ジャンボリー期間でたくさんトレードをしてきましたが、日本の物をあげた時に喜んでもらった事が1番嬉しかったです。他にも沢山の交流をしてきましたが、人生で一度きりの貴重な経験になったと断言できます。最高に楽しかったです。

25WSJ IST 活動報告

川崎第54団 荒木愛那

“See you in Poland” 別れ際に各国の仲間達と交わした言葉です。今回韓国のセマングムで行われた第25回世界スカウトジャンボリーに私はInternational Service Teamとして参加しました。ISTは派遣隊とは異なり、大会の運営側としてプログラムに奉仕し、与えられたジョブの運営を行います。私はoff-site programに配属されジャンボリーサイト場外

で行われるテコンドープログラムの運営をおこないました。と言っても実際にアクティビティを仕切るのは現地のボーイスカウトボランティアとテコンドー施設の方でISTの主な仕事は参加隊スカウトたちの安全管理でした。



テコンドー施設はジャンボリー会場からバスで2時間ほどの場所にあったため、プログラム中は毎日2時間の道のりを様々な国のスカウトと一緒に往復していました。

このようにISTの魅力は世界各国のスカウトと近い距離感で接することができる点だと思います。また、ジョブ仲間も多様な国籍の人がおり、コミュニケーションは英語で行っていました。人に恵まれジョブ仲間とも沢山の交換品をスワップしました。



大会がようやく折り返し地点に辿り着いた頃、台風の影響でセマングムからの退避を大

会運営側から伝えられました。まずは参加隊のスカウトの退避が優先され、その後にISTが続く形でした。ここから「移動ジャンボリー」が始まりました。最初の避難先である救仁寺にはISTは深夜1時過ぎに到着し、2泊ほどし、その後は帰国日まで大学の寮を繋ぎ歩きました。次の日どこに泊まるか分からない状態や、深夜移動が続き大変なことも多かったです。しかしこの困難な状況や言葉や文字も通じない土地で頼れる人が周囲のISTだけであったため、絆は言葉では表せないほど深まりました。帰国後も定期的に多くの仲間と会っています。またISTとして参加したことで、日本各地から派遣されたスカウトと出会うことができ、スカウティングの幅が広がったように感じました。



今回のジャンボリーでは日本はもとより、それ以上に様々な国のスカウトと仲良くなる

ことができ「スカウトは兄弟」という言葉を体現したような大会になりました。

次回、第26回世界スカウトジャンボリーはポーランドで開催されます。ぜひ次のジャンボリーに参加してみたいと思ってくださったらとても嬉しいです。“See you in Poland!”

《各地区の活動報告》

ファイヤーアッシュへの思い

横浜地区 彦井文男

9月3日に6YSC（第6回横浜地区スカウトジャンボリー）の解隊式が行なわれ、参加者全員に小さな小瓶に入っている“ファイヤーアッシュ”が配られました。最終日に行われた大営火の灰ですが素敵な思い出になりました。



6YSCは8月10日～13日（BSは8日から）群馬県国立赤城青少年交流の家で「未来への

アプローチ」をテーマに行われました。参加者はスカウト351名、役員・指導者215名、横浜地区以外に群馬県連、川崎地区、みなと地区、湘南地区、さらにはBSAフィリピンのスカウト、指導者も参加しました。

BS、VSは5泊6日の野営、CSは3泊4日の舎営、赤城高原といっても昼は30℃を超える中皆元気に活動していました。

プログラム内容ですが場内はミステリーハイク、モルック、ツリークライミングなど、場外は、ラフティング、マス釣り、赤城登山、自衛隊見学など合わせて15以上ありました。スカウトたちは班ごとや隊ごとで選択し思う存分楽しんでいました。



そして最終日の大営火では厳かな雰囲気の中で金田賢一さんの「BP 最後のメッセージ」の朗読に始まり、スカウトソングで盛り上がりました。

準備期間2年、横浜地区の役員、指導者のほとんどが関わりを持ち、輸送関係、野営・舎営管理、配給・食堂部、施設資材部、プログラム運営など様々な部門がスカウトの笑顔と満足した様子を見たいため奮闘してきました。おかげさまで大きなけがや事故もなく無事に終わることができました。

小さな小瓶に入っている“ファイヤーアッシュ”ですが「未来へのアプローチ」となるでしょう。7YSC でスカウトたちが小さな小瓶を持ち寄り6YSC の思い出話に花を咲かせてもらうことを信じています。

丹沢スカウト・トレイル 2023

みなと地区

ハイアドベンチャー委員会

9月16日～18日に丹沢スカウト・トレイル

（以下、丹沢トレイル）を開催しました。

丹沢トレイルはVSを対象に、広大なフィールドを持つ丹沢での移動キャンプを通じて、野外活動の経験やスキルを高めることを目標としています。また、神奈川を代表する野外フィールド「丹沢」を歩くことで、自然を慈しみ郷土愛を育むことも目的の一つです。

今年度は伊勢原第1団と第2団、横浜第30団と第116団、横須賀第17団の計5団から8名のスカウトが参加しました。参加スカウトはハイアドベンチャー委員会（以下、ハイアド委員会）が設定した野営地を宿泊地とし、1日10kmの徒歩行程を目安に2人以上のチームで移動キャンプを計画・実施することが求められ

ます。今年度の野営地は、伊勢原第1団第2団野営地、蓑毛キャンプ場、表丹沢野外活動センター、大倉高原テントサイトの4カ所を設定し、選択してもらいました。



スカウトたちは宿泊装備を入れたザックを背負い、チームごとに計画した行程に沿って歩きました。野外スキルを高めるには残念ながら3日間とも天候には恵まれてしまいましたが、普段背負うことのない重さの荷物に加え、厳しい暑さの中でのトレイル歩きは足取りが重かったのではないのでしょうか。しかし、野営地に到着したスカウトたちの顔は、どこか達成感に満たされていた気がします。

野営地ではハイアド委員と、スタッフとして参加希望のあったRSが、参加スカウトたちの到着を待ちます。到着後、各チームは設営し、持参した食料を使って夕食を食べます。食事が終わるころにはすっかり日も暮れ、火を囲むのに絶好のシチュエーションが訪れます。参加スカウトとスタッフが焚火を囲んで語り合う「夜の集い」は丹沢トレイルのハイライトの一つ。これまでのスカウト経験や、自団の特徴などを紹介し合って夜は更けていきました。「自団のローバーが活動に来ないから、一緒に活動できて楽しい」「プロジェクトの話を先輩スカウトから聞いた」そんな言葉があふれる時間でした。



今年度も大きなトラブルなく、スカウトたちは各々の団に戻ることができました。どの団もVSの継続的な活動には苦慮をしていると思われる。活動を続けるVSにレベルの高い野外活動を経験させることも大切ですが、他の団のスカウトと交流したり、ローバースカウトや指導者の話を聞いたりすることはモチベーションの向上に繋がり、高みを目指す上では重要だと思います。次回の丹沢トレイルでもそのような場を提供できるよう、ハイアド委員会も準備したいと思います。

団委員研修会で団の悩みを共有する

県央地区

県央地区では、ボーイスカウト（BS）講習会／デンリーダー（DL）研修会／団委員研修会を指導者養成事業の三大柱として、特に力を入れて実施しています。BS講習会をご存じの通り日本連盟の定型訓練ですが、DL研修会は県央地区が全くの独自でやっている定型外訓練です。

そして団委員研修会は、定型外訓練とはいえ県連が主催し、地区が開催する指導者養成事業であります。昔から県連が実施していたものを、平成15年から地区開催に移管。のちに「神奈川連盟指導者訓練体系」の一環として目的・目標・セッションの組み立てなどが定式化されました。

参加者は、最近団委員になったばかりで何も知らない保護者や、長年特定業務だけに専念してきて全体に意識が及ばないベテランなど、幅の広い方がいらっしゃいます。日本連盟への登録の有無にかかわらず参加してもらっています。


内容は、団委員研修所の簡略版とも言えませんが、団における進級面接会や団委員会などを模擬で体験したり、事前のアンケートを基に各団の課題をあぶりだし、みんなで共有したりと、一方的に知識を詰め込むのではなくそれぞれの実態に迫る充実したものになっています。日帰りの研修としては盛沢でしょう。


参加申込がなく中止になった年もありましたが、開催時期をずらしたり、各団へ個別に参加をお願いするなどの“営業活動”も奏効して、なんとか続いて来ました。

参加者の声は「団会議と団委員会の違いや重要性を知った」「自団の課題に対して解決の方向が見えた」「他団の実情を知って自分たちの参考になった」など有益なコメントを多くいただいています。来年開催の際は、ぜひ団委員のみなさんを送り込んでください。

《2022年度富士章受章スカウト紹介》

2022年（令和4年）度は、神奈川連盟から13名の富士スカウトが誕生しました。

	地区	団号	氏名
	横浜	横浜第8団	堤 瑛一
プロジェクト名称・テーマ			
災害ボランティア活動を考える			

	地区	団号	氏名
	川崎	川崎第46団	仲井飛祐
プロジェクト名称・テーマ			
プラゴミによる環境問題（動画制作）			

	地区	団号	氏名
	横浜地区	横浜第130団	仲神侑恭
	プロジェクト名称・テーマ		
団歌を作る			
	地区	団号	氏名
	横浜	横浜第79団	野々目花
	プロジェクト名称・テーマ		
重ねて、つなげて、わくわくいっぱい！			
	地区	団号	氏名
	湘南	藤沢第12団	野元心結
	プロジェクト名称・テーマ		
ガーナの子供たちの未来を支える			
	地区	団号	氏名
	川崎	川崎第46団	原田愛莉
	プロジェクト名称・テーマ		
The Legacy of the Boyhood Moratorium			
	地区	団号	氏名
	県央	津久井第2団	樋口レイ
	プロジェクト名称・テーマ		
共生社会プロジェクト（奉仕活動）			
	地区	団号	氏名
	川崎地区	川崎第54団	平松毅士
	プロジェクト名称・テーマ		
うえぶキャン△（BS向け野営場検索サイト）			
	地区	団号	氏名
	みなと	横浜第11団	榎原珠里
	プロジェクト名称・テーマ		
ドッグトレーニング（研究）			
	地区	団号	氏名
	川崎	川崎第54団	松嶋洋介
	プロジェクト名称・テーマ		
Root to 瀬戸内～ゴミの島豊島へ行く～			
	地区	団号	氏名
	横浜	横浜第20団	松竹航希
	プロジェクト名称・テーマ		
小学生の後輩を増やしたい・2022の冬			

	地区	団号	氏名
	みなと	横浜第31団	望月晴信
	プロジェクト名称・テーマ		
平板測量に挑戦			
	地区	団号	氏名
	湘南	鎌倉第2団	山野井愛志
	プロジェクト名称・テーマ		
コロナ禍における国際交流を通じて			

＜富士章受章者・神奈川県知事表敬訪問＞

2023年3月20日（月）の午前、2022年度に富士章を受章した13名の富士スカウトは、神奈川県庁舎に黒岩県知事（BS神奈川連盟・連盟長）を表敬訪問して、富士章受章を報告しました。

※写真は、黒岩知事面会前に県庁職員の方から説明を受けているスカウト達の様子です。



題字 元連盟長 津田 文吾（当時神奈川県知事）
発行 令和6年（2024年）3月28日
発行人 一社）日本ボーイスカウト神奈川連盟理事長 濱田雅弘
編集人 同 神奈川連盟組織戦略委員会 委員長 境 紳隆